

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

憎しみの形

### 【作者名】

沖野ミノン

### 【あらすじ】

人間に危害を及ぼす“死神”を退治することとなった主人公、井野。

しかし、途中である異変に気付く。。。

「裏で何かが働いているっ。。。」

しかし気が付いた時にはもう手遅れだった。

驚くべき陰謀とは!?

しかし全てが終わろうとしたとき、唯一の希望をみつける！

仲間とともに戦う大切さ、そして信用する怖さ、そして疑う後悔が映し出される。

## 始まり

深い闇に包まれた夜・・・

私は必死に逃げていた。

走っても走っても、後ろから追いかけてくる足音が聞こえてくる。もう足は限界に達していた。

暗い森の中に、自分の荒息が響いている。

後ろとの距離はどんどん詰まっっていく。

後ろを振り向く余裕もなく、とにかく真っ直ぐに逃げる。

しかし、足音が自分のすぐ後ろまで追いついたとき、ぴたっと足音が止んだ。

一瞬の安心から、前のめりに思いきり倒れこんだ。

すぐさま後ろを振り向いたが、そこには誰もいなかった。

周りを見渡しても、深く暗い森がひたすら続いているだけだった。

呼吸を整えようと深呼吸をした。

全身から汗が滝のように流れ、手や足には無数の傷があった。

多分逃げているときにやったものだろう。

さっき転んだときに擦りむいた膝の傷も、緊張で今まで痛みも感じていなかった。

疲弊した体をゆっくりと起こそうとした時、

“グサッ”

「うっ。。。」

腹にもものすごい痛みを感じた。

半分立ち上がるうとしていた体が前に倒れ、うつ伏せになった。

ひどい痛みで頭痛がでてきた。

腹からは血がとめどなく流れだし、自分の周りの地面を赤く染めた。

少しでもここから避難しようとするが、意識が朦朧とし、力がうまく使えない。

後ろから、ガサツガサツと相手が近づいてくる音がする。なんとか離れようと最後の力を腕に込め、手の力だけで体を引きずる。

爪が剥がれたが、そんなことは気にしていられなかった。相手が自分に追いつき、体の上にまたがった。

少しの静寂のあと、  
“グシャツ”

首から肩にかけてを刀で切られた。

周りに血が飛び散った。

もう力も出せず、目の前が見えなくなってきた。

自分は最後に小さく、

「……勝った。」

と呟き、息絶えた。。。

森の中に、月の光に照らされて血が赤く輝いていた。

ー10年前ー

「君が新しく入った、井野一史か。」

「はい。よろしくお願いします。」

私は初めて会うAGUKI部隊隊長の小野安久樹に事務室で挨拶をした。

部屋の中は、案外広く、机が並び、特に面白味のない部屋だった。

「まあまあ、そんな固くならずじ。」

後ろの扉からこの室長の天道真由が入ってきた。

「あ、ありがとうございます。」

そういう天道室長は、とてもスタイルが良く、モデルになってもおかしくない体型だった。

その中には、絶対好意を持っている奴がいるだろうなあ、と、ろくでもない考えが浮かんだ。

“全く、俺は何を考えているんだか。。。” すぐにどうでもいいことを考えてしまうのは、俺の難癖なのでね。。。 ”

「今、お茶入れるから、座ってて。」

「あ、私がやりますよ。」

「いいのよ。これくらい。」

私は遠慮気味に自分の机についた。

天道室長は、笑顔を浮かべながら、コップにお茶を注いでいる。

「そっやっていつも天道室長は甘やかすんだから。。。 ”

と小野は私に鋭い視線を向けてきた。

なるべく気づかない振りをしてなんとかスルーしておこう。

俺は敢えて気付かないふりをした。

私がここ、退治対策室に就いてこれで3日目になる。

現在の日本には、恨みを持った人間が死ぬと怨霊となりこの世界に怪奇現象や恐怖現象などを引き起こす。

その怨霊の8割は、次第に報われるか、成仏して極楽浄土に行ける。

しかし、怨霊がなんらかの事象で墮落すると、死神へと転生する。

怨霊は人間に物理的な危害を加えることはないが、

死神は強い怨恨によって、人間に甚大な危害を加えるようになるのだ。

逆に、私達は怨霊には攻撃が効かないが、死神なら攻撃を与えることができる。

死神によって昨年は450人が死亡、980人が負傷した。

その被害は年々増加しており、こつした被害をなくすため、死神を退治するために設立されたのが存霊対策局である。

私は幼いころから武術の訓練を父にさせられていた。

来る日も来る日も刀を持って、道場で1日中練習していた。

そのおかげからか、中学の時に存霊対策局にスカウトされ、情報統  
計室でずっと活動してきた。

しかしこの前、ある問題をおこし、この退治対策室へと配属されて  
しまった。

「はい。ズレない。」

天道がお茶をくれた。

「ありがとうございます。」

温かいお茶かと思っ、息を吹いて冷ましたが、どうやら冷たいお  
茶だったようだ。。。

それを知っていたのか、小野は隣でクスクスと笑っている。  
「たたく、いちいち嫌らしい奴だ。。。」

この退治対策室には約30名が所属している。

今、この事務室には20人ほどいるのかな。と、辺りを見渡してい  
ると、

「とここで井野君。」

と天道から声をかけられた。

「君は死神を退治したことはある？」

「それはもちろん。前にいた所では、トップファイターとして貢献し  
ていましたよ。」

つい自信が態度に出てしまった。

「ゴホン」

とひとつ咳払いをして、場を立て直した。

天道は俺の言葉にあまりいい顔をしなかった。

「そう。」「どこでもくれぐれも注意してね。」  
と忠言された。

少し気に食わなかったのかな。まあ、実戦で腕前を発揮できればい  
いか。と実戦に意気込んだ。

## 予感

いきなり部屋のサイレンが鳴った。

どつやら出動らしい。

緊張の走るサイレンが、部屋中に響いている。

天道が、「上野駅北西5km地点に死神が発生」

と、落ち着いた口調で告げた。

一斉に部屋が騒がしくなり、各々が机から立ち上がり、武器などを持ち出している。

「今回のやつはでかぶつらしいな。」

「ああ。お前今度はしっかりやれよお。」

ぶつぶつと話しながらみんなは部屋から次々と出ていった。

この退治対策室は、3つの班に分かれており、

1つは3つの部隊から成る、処理班。これは計16人。

主に、死神に攻撃を与え、退治する役目を持つ。

1つは現場に立ち会い、後方から援助する、支援班。これは計8人。

1つはここに残り、情報提供、支援する、情報班。これは計5人。

処理班では、小野率いるAGUKI部隊、岩山正平率いるSH部隊、そして私が属する橋本竜司率いるRYUJI部隊と分かれている。

橋本は、髪が黒のショートヘアで、気さくで割と話しやすい人だと、

井野はなんとなく感じた。

金髪の頑固である小野と違って。。。

私は橋本他、メンバー3人に続いて部屋からでた。

それぞれの部隊がヘリコプターに次々に乗っていった。

私も流れるようにへりに乗った。

“バタバタバタ…”

プロペラの音が頭に響いてきた。

風で乱れた髪を井野は少し手直す。

座席につくと、この部隊5人が2人と3人に分かれて、向かい合わせに座った。

ここに配属されて3日目だが、未だにこの空気に慣れていない。何かみんな面持ちが真剣というか。。。

すると無線で、

「……ジジッ。今回の死神はレベルCだ。よろしく頼む。……ジジッ」

レベルC？私は一気に緊張した。

なぜなら、今までいた所では殆どがレベルEかDで、Cなど出会ったことがない。

このレベルはEが最低レベルで一番弱い。逆にAが一番強いというランク付けがなされている。

“あれ……？”

さっき、事務室で誰かが今回の奴は、でかぶつとか言っていたような。。。

あれはランクC程度のものを指すんだっただのか？

まあ、俺にとって、強いことには変わりないんだがな。。。

私は、自分の刀、その名も「イノ3号」を強く握りしめた。

すると、隣に座っていた、同じ部隊の平田晴香が、

「君、刀で戦うの？」

と不思議な顔でこちらを見てきた。

「あ、はい。一応自分の持ち技なんで。」

「へえ。でもあまり敵に近づくと危ないよお。」

「それは小さい頃からやってきてるので大丈夫です。」

「それは頼もしいねえ。あ、自己紹介忘れたね。私は平田晴香。よろしくね。」

「あ、俺は井野です。来たばっかなんでよろしくお願いします。」

平田は優しく微笑んでくれた。

平田の手元を見ると、スナイパーライフルを手にしていた。遠距離

からの攻撃が得意らしい。

他の人たちは、拳銃、マシンガン。隊長はロケットランチャーで

あつた。

なにか自分の武器が浮いているような気がするが、あまり気にしないことにする。

どつやら目標地点の上空に来たらしい。

ヘリコプターが下降を始めた。

操縦士が、

「早く片付けてくれよお。今日は見たいテレビがあるんだから。。。」  
とみんなに言った。

「もっと畏敬の念を持ってくださいよ。私たちはみんなの安全を背負っているんですよ。」

橋本が笑いながら答えた。

ヘリコプターからみんなが降り、目の前に広がっていた公園を進んでいく。

他の部隊は違うところで着陸したようであり、周りにはいなかった。

時計を見ると午後6時を指している。

秋のこの季節は、もう薄暗くなっている。風も夏とは打って変わって涼しい秋風となっている。

一行は公園の林の中を進んだ。

ザザザーッと風で葉が揺れ、不気味な雰囲気を出している。

他の隊員たちはゴーグルのようなものをつけていた。

実は死神というのは、実際は目に見えないものであり、特殊な装置で見ないと確認できない。

隊員たちは、そのゴーグルを頼りに戦う。もしゴーグルが外れたものなら、どこに敵がいるのか分からず、敵の方向へ、のこのこ歩いて行ってしまうことだってあり得るから大変だ。

一般市民から見ると我々は、何も無いところに一斉に発砲している  
としか見られていない。

民間人には、自然災害ということとで納得してもらっている。



なんとも不思議な現象だ。

しかし、俺は生まれつきの能力からなのか、肉眼でその死神を目視することができる。

つまり、そのゴーグルとやらは必要ないのだ。

今にとつては便利だが、小さい頃はそれが原因でいじめられてきたこともあった。

井野は忌まわしい思い出を頭から消すかのように横に振り、任務に集中した。

“パンパン、パンパン”

突然、奥の方から銃声が響き渡った。

どうやら他の部隊が発見して発砲したらしい。

RYUJI部隊は一斉に音のした方へ走り出した。

井野も、やや後方からそれに続いた。

なにやら嫌な予感がする。と井野は直感でそう思った。

## 惨劇

音の発生源を追って少し開けたところにてた。

すでに他の部隊の人たちは円形に広がり、20mくらい離れた所からあれを凝視している。

そう。そこにいたのは、身長5mくらいはあるかという死神だった。

顔は骸骨で、眼の部分が赤く光っている。体全身を黒いマントで覆い、手にはその体よりもひとまわり大きい斧を持っている。

井野は驚いた。今まで、こんな相手とは戦ったこともないし、見たこともなかった。

刀を握っている手が汗ばんでいる。

井野は、後ろめたい気持ちを抑えて、心を静めて刀をゆっくりと抜いた。

「攻撃開始っ！」

という小野安久樹の掛け声で、すでに集結していた3部隊が一斉に攻撃し始めた。

“ババババン、ダンダン”

銃声が鳴り響き、木にいた鳥たちが驚いて空に散った。

俺は深い深呼吸をしてから、

「おーーーーー」

と敵に向かって一直線に走りこんでいった。

こちらに気づいたのか、死神がこちらに体を向けてきている。

避けられる自信はあった。俺は幼いころから特訓してきた。それに、前いた部署でも大活躍を成し遂げているのだ。

いつものようにやればいい。

そう思いながら、みるみると相手との距離を縮めていった。

後方からの銃弾で死神は少しよろけていた。

しかし、そんなことは歯止めにならず、俺に向かって死神が大きく

上に斧を振り上げた。

その風圧で少し走る速度が落ちた。それを感じて、改めて相手の巨大きさに圧倒された。

「注意しろーっ」

後ろで橋本竜司が叫んでいる。

「そのくらい分かってるぞ。」

俺は心の内でそう返した。

今までより強い相手であろうと、多少の自信を持っている。余裕の笑みをこぼした。

すると死神は全体重をかけて、その振り上げた斧を俺に向かって一気に振り下ろしてきた。

俺は瞬時にそれを判断し体を右に翻ひるがえさせる。

“ドーンッ”

斧はすぐ左の地面に突き刺さり、とてつもない砂埃をあげた。

そのせいで周りが見えず、息もあまりすることができない。

目に砂が入ることを承知で、懸命に周りを見た。

何か飛んでくると思い、その場で身構えた。

すると左から斧が横に飛び出してきた。

“ブンッ!”

俺はとっさにうつ伏せになり、なんとか斧は自分の頭上すれすれを勢いよく通過していく。

「なかなかやるじゃねえか。」

久々の手強い相手に、俺は少し興奮気味になった。

相変わらず、周りからは銃声が絶えず聞こえており、自分の中で、死神ももうそろそろ弱ってきてるんじゃないかと思いはじめてきた。

すると砂埃がだんだんと収まり、周囲がはつきりと見えてきた。

再び死神の方に目を向けたとき、ちょうど死神はSH部隊のすぐ傍に立っていた。

いつの間にか死神は、俺が砂埃にまみれている間に、ここから数十メートルの位置に移動していたのだ。

急いで駆けつけようと思ったとき、死神はその部隊の位置で斧を横

にめいっばい振り回した。

「あっ！」

と思つた時には遅かった。

そこにいたSH部隊の数名の上半身が一度に宙に舞った。

“ズバツ！”

鮮やかな血が飛び散り、死神の斧を赤く染めた。

腰で切断され、人間の体が真っ二つに分かれた。。

上半身が消えた下半身が、まだ立っているのがはっきりと見える。

その下半身も、数歩よろけた後、地面に倒れた。

また、残りのSH部隊もその風圧で体ごと数十メートル吹き飛んだ。

あまりの悲惨な光景に、井野は目を見開いて、立ち尽くすしか出来ないでいた。

しかし、なおもAGUKI RYUJI部隊は敵に向かって銃で応戦している。

死神は体にその弾を受け、体に複数の穴が開いてきているにも関わらず、全く攻撃の手を緩めようとしない。

俺は目の前の惨状に唾然とし、足が震えている。

そして、今までにない恐怖が体を駆け巡った。

俺は、はっと我に返り、自分のやるべきことを思い出し、体に力を込めた。

「俺は、みんなのことを助けるんじゃないのかよー！」

「あいつを倒さなきゃいけないんだー！」

井野は再び敵のもとへ走り出した。

“今度は後ろから攻撃しよう。”

そう井野は思い、相手の後方から近づき、

“ズバツ”

と敵を切りつけた。

“ウォーラー”

と、鼓膜が破れそんな叫び声をあげ、死神は前のめりになった。

これは攻撃が効いたか？

と少し安心したのもつかの間、

敵は前のめりになった勢いで右方にいたAGUKI部隊に斧を振り回した。

「えっ!？」

こちらに攻撃を回してくると予想していなかったAGUKI部隊は数名の足が切断された。

「あ~~~~」

切られた人たちが悲痛な声をあげている。

「支援班!!支援班を呼べ~~~~!」

小野安久樹隊長は仲間にそう叫んでいる。

続けて死神は、その斧を下から上へすばやく振り上げた。

そして斧のすぐ傍にいた隊員が即座に犠牲になった。

その隊員は、勢いよく斧の先端にひっかかり、数十メートル上空まで持ち上げられた。

その血が下にポタポタと滴り落ちている。

「おい、死神！俺はこっちだ！なぜ俺を攻撃しないんだ！」

俺は後ろからそう叫んだ。

その言葉など通じるわけもなく、死神は俺の目の前で、逃げ惑うAGUKI部隊を狩っている。

俺は足の力が抜け、しりもちをついた。

「一体、どうしろっていつんだ。。。」

もう絶望的になった。

さっきから攻撃している銃弾は、こいつにとって効いているのか効いていないのかわからない。

しかしだんだんと、顔の骸骨の骨が砕け、よたよたとしてきたのは分かる。

本当ならば今ここで相手を刀で切りつけなければいけないところだが、自分にはその勇気はなかった。

また変に攻撃して、他人が傷つくのが怖かった。

もう限界だ。。。と思ったとき、

“シュー”

と自分の左を、ロケットランチャーが死神めがけて飛んでいった。多分、竜司が撃つたものだろう。

その弾は運よく、敵の腹に直撃した。

“ドーン”

その衝撃で骨が砕け、腰から下がもろもろと崩れ落ちた。

死神は、「ぐわ~~~~~」と力なく倒れた。

俺の前方でくたばっている。

半身状態になった死神を見た井野は、

「やったぞ。。。あとちょっとで勝てる。隊長さん、ありがとうー！」

と少し希望が見え、体に力が入ってきた。

立ち上がるうと思った瞬間。

“ガンッ”

「い~~~~~！」

井野は突然の痛みにもその場でもがいた。

足元を見ると、あいつの斧が自分の片足に直撃していた。

なんと死神は数十メートル先から自分の斧を俺にめがけて投げってきたのだ！

長さ5m以上の斧が足の膝下あたりに刺さり、当然俺の膝から下は完全に切断されていた。

「あ~~~~~」

あまりの痛さにまともに声も出せなかった。

「今更、俺を殺すってか。。。」

死神は半分しかない体を起こし、俺のもとへズルズルと寄ってきた。た。

「た、助けて。。。」

片足を失った井野は、そう叫ぶしかなかった。

片足がない状態で、うまく立てない。

せめて隊長の竜司のところまで辿り着こうにも、相手を巻けるわけがない。。。

数十メートル離れていたのに、死神の2歩程度で追いつかれ、たつま 井野の足元に来ている。

赤い眼がこちらを睨み、その眼には憎しみが込められていた。

井野は、もう半泣き状態だった。

死神は足に刺さっていた斧を引き抜いた。

「ぐあー。」

抜いた時、再びとてつもない痛みが全身を走った。

「や、やめてくれ。。。。」

必死に逃げようとしたが、やはりなかなか進むことができない。

竜司を見ると、さっきのロケランが最後の弾であったのか、アサルトライフルを連射している。

その弾も、もうまともにも当たっていない。

周りを見ても、すでに逃げた者、狂ったように銃を連射している者、

呆然と立ち尽くす者、

到底、俺なんかにも構っている余裕はない。

死神は最後の獲物でもあるかのように、じっと俺を見つめている。

そして、ゆっくりと斧を振り上げた。

もうだめだと思った。

逃げることを諦めて、目を瞑った。

今までの思い出が頭をよぎった。

本当に情けなかったと思う。他の人たちも助けられず、退治なんて全然できなかった。

今になって自分の本当の弱さを知った。

“天道室長はあの時、注意してくれたっけな。

あの言葉通り、もつとちゃんと注意してれば良かったな。。。。”

次から次へと後悔がでてくる。

そして死神が斧を下ろそうとした。。。。

俺は息をのんだ

## 疑問

「――そして死神が斧を下ろそうとした。。」

しかしその時！

「ダンッ」

.....

死神は振り上げた動作で停止し、そのままの体勢で後ろにゆっくりと倒れた。

「ドサッ」

仰向けに倒れた死神の赤い眼から、光がゆっくりと消え、死神は死んだ。

俺は何が起こったのかわからなかった。

橋本も呆然と立っている。

「い、一体、何が起きたんだ？」

場が静寂に包まれた。

ふと周りを見ると、遠くの方で平田晴香が手を振っていた。

そう。平田がスナイパーライフルで相手を仕留めたのだった。

助かった。。。

本当に危機一髪だったな。。。

「あれ.....なんか.....」

俺はそのまま意識が遠のいていった。。。

気が付くと俺は病室にいた。

俺は助かったのか。

自分の手を上に挙げて、改めて生きていることを実感する。

ふと自分の脚を見るとやはり切断された左の脚が、膝下から無くなっていた。

あれは夢じゃなかったのか。

あまりの恐怖だったことにそんなことまで考えてしまう。



「これではまともに走ることできないんじゃないのか？」

「ちゃんと今までのように走れるのか、それがとても心配だった。すると病室に、隊長の橋本竜司が入ってきた。」

「よう。良かった。目が覚めたんだな。」

「俺、どれくらい眠ってたんですか？」

「あれから今日で三日目だ。」

「そ、そんなに意識なかったんですかあ。」

「そうだ。まあ意識が戻ってよかったよお。」

「よいっしょ。」

「竜司はベッドの隣にあったイスに疲れ切った腰をゆっくりと下ろした。」

「深いため息が、今回の惨劇を物語っていた。」

「あの時のロケットランチャーには助かりましたよ。」

「あまり思い出したくない事象だったが、一応お礼は言っておこうと思っただけだった。」

「いやいや、実際あの攻撃じゃ倒せないかったし、お前の役には立たなかった。」

「しかし、あの攻撃である状況の転機になったのは間違いない。」

「でも、いろいろありがとございました。」

「礼を言われるような事はしてないさ。」

「と、橋本は初めて笑顔を見せた。」

「それより、井野聞いてくれ。」

「急に、竜司の面持ちが真剣になった。」

「咳払いをひとつして、椅子に居直った。」

「あの、死神のランクなんだがな、」

「小声で俺に話しかけた。」

「あ、はい。確かランクCでしたよね。」

「そう。あの時、確かに無線でそう伝えていたことを思い出す。」

「それが、室長さんの調べによると、どうやらBだったらしいんだよ。」

「えっ？ どうですか？」

「実はこのランク通知は毎度、情報統計室が行っている。」

前、自分がいた部署であるが、その仕事には関わっていないかった。確かに、思い出すと、ある班が毎回毎回ランクの調査をしてたっけな。

でもその仕事は、前例や被害状況、怨念の強さを、規則によってランク分けするだけの至って単純な仕事であった。

「そのランク調査を天道室長が自分で行い、その結果がBだと・・・？そういうことですか？」

「そういうことだ。室長自らの口からこぼしていたのをちょっと聞いてしまっただよ。。。」

「そ、それはどちらの情報が正しんでしょうか？」

「気づいたら、ベッドから身を乗りだしていたことに気づき、もう一度横になった。」

「今回の相手の強さは、我々の予想を遙かに上回っていた。」

我々は、ランクCに見合った武器を選び、それで対抗した。

しかし、相手には全然敵わなかった。こんなことは今までにない。確かに、あの時の射撃は相手にとって効果があったとは言えない。

「じゃあ、やっぱり、ランクはBだったのでしょうか？」

「そうだと思う。」

橋本は下を向いている。

俺は、ベッドで天井を見上げたまま考えた。

「一体これはどういうことなのだろうか。」

単に情報統計室が誤った判断を出した？それならすでにそれなりの通達が来ているはずだ。

故意にやったものなのか？それなら、なぜそんなことをするのだ。。。？」

頭は疑問でいっぱいになった。

「これは、他の人には伝えたんですか？」

「ひとり、平田には伝えた。他には言っていない。」

つまり、このことを知ってるのは、天道室長と橋本隊長、俺、平田の4人ということか。

まあ、室長が他の人に言ってなければの話だが。。。

「まあ、あまり気にするな。あまり首を突っ込まない方がいいような気がする。」

と、橋本は俺の肩に手を乗せた。

「あとで、平田に礼を言っておけよ。平田がいなかったらお前は今頃死んでたんだからな。」

橋本は、冗談ばく笑いながら言った。

「そうでした。平田にはとても感謝しています。今度会ったときにしておきます。」

「そうしてくれ。」

よいつしよ。橋本は重たい腰を上げて、椅子から立ち上がった。

「また今度くる。早く退院しろよ。」

「はい。なるべく早く復帰できるようにします。」  
と意気込んだ。

「でも、あまり無理はするなよ。んじゃあな。」

手を軽く上げて、病室を出て行った。

思ってみれば、こうして2人で話したのは初めてだったな。

井野は、予想よりも仲間思いでとても良い人だと感じた。

「ふう〜」

俺は体に溜まった、よどんだ空気を吐きだし、目を瞑った。  
するとすぐに、深い眠りについてしまった。

目を覚ますと、隣の椅子には平田が座ってた。

「あ、おはよう。よく眠れたっ？」

明るい声でそう挨拶をしてくれた。

窓を見ると、朝日が差し込んでいる。

日が変わったのか。。。。

「あ、おはようございます。」

目を擦りながら答えた。

「脚の方は大丈夫？」

平田は俺の足を見て、心配そうに言った。

「おかげでもう痛みは引けました。それより、先日は本当にありがとう。」

うございましたっ。

平田さんに命を助けてもらって、なんとお礼を言ったらいいの  
か。。。」

井野は、顔を紅潮させて精一杯お礼を言った。

平田はにこっと笑って、

「ああいつ時は助け合っのが当然ですよ。私はただ当然の事をしたま  
でですよ。」

俺は、本当にいい仲間巡り合えたと思う。

「今度、何かお礼をしますよっ。そうじゃないと俺の気持ち許さな  
いです。」

井野は平田の手を握って、言った。

「いえいえ、そんな悪いですよ。気持ちだけ受け取っておきます。」

平田は微笑みながら軽くお辞儀をした。

俺はなんだか、涙が出てきた。

それは安心からなのか、仲間の優しさからなのかは分からないけ  
ど、とにかく大声で泣きたい気分だった。

「ど、どうしたんですか!？」

平田がびっくりしたように言った。

「いや、ちょっと。。。。なんだろっ。。。。」

流れた涙を手で拭いながら、照れくさく笑った。

「もう安心して下さい。平気ですよ。」

「ありがとうございます。平田さんのおかげで勇気ができました。」

涙を拭いた、井野の目には、土気の光で満ち溢れていた。

「早く退院して、またみんなと会えるのを楽しみにしてます。」

「うん。早く戻ってきてね!。。。。」

笑顔浮かべた平田を見た井野は、どこか違和感を感じた。。。

「じゃあ、また今度来るね。」

と、平田は椅子から立ち上がり、足早に病室を出て行った。

“あれ、、、なんか隠してた?”

さっきの笑顔の平田の顔が頭に残っている。

笑顔の下に違う感情があるようだった。

そういえば、昨日橋本は、あのことを平田にも話したと言った。でも平田は今回その話題については触れなかった。俺を気遣ってのことなのだろうか。

まあ、今度会ったときにでも聞いてみよう。

あの悲劇が終わった井野の心の中には、安心と疑問が交錯していた。

## 尊

1か月後1

俺は、病院を背にし、歩き出した。

今日は、念願の退院日である。

幸い、足の傷は、膝関節が残っていたおかげで、脛すねの部分は、簡単な義足で済ませることができた。

膝関節が残っているのとないのとは大きく違う。

もし関節がなかったら、屈伸運動が自力でできず、膝が曲がらず走ることが困難になるからだ。

刀で戦う井野にとっては致命傷になることになる。

リハビリを懸命に取り組んだ成果からか、今はもう義足歩行にも違和感を感じなくなった。

井野は、病院前に止まっていたタクシーに乗り込んだ。

しかし、さすがに前のようにスムーズにはいかず、少々手こずってしまった。

なんとか車内に乗り込み、

運転手に、

「存霊対策局に。」

と一言告げると、タクシーはゆっくりと発進した。

井野は、携帯を開き時刻を確認した。

“9:17”

朝の陽ざしが窓越しに当たり、タクシーの揺れもちょうど良い。

だんだんと瞼が重くなり、ふとしたときには、眠ってしまっていた。

「お客さん。。。お客さん？」

運転手の声で、はっと目覚めた。

窓を見ると、見慣れた光景が広がっていた。

「着きましたよ。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

俺は、前に表示された料金を確認した。

“ 5140円 ”

結構かかるな。。。

多分、この経費くらい出してくれるだろう。

あとで天道室長に頼むことにしよう。

運転手に6000円を出した。

運転手はそれを静かに受け取り、お釣りの準備をしている。

すると突然、

「お客さん。最近、変な噂が流れているのは知っていますか？」

運転手がバックミラーでこちらを凝視しながら質問し、井野は少し驚いた。

「え？変な噂・・・？」

何か嫌な予感がする。

「まだ知らないんですか。。。」

少し運転手の顔がにやけている。

「今日まで入院していたもので、で、その噂ってなんですか!？」

前に身を乗りだして運転手に問い詰めた。

「いや、実はね。。。この存霊対策室の隊員の一部分が、民間人を殺したって噂なんですけどね。。。」

口に手を当てがいながら、小声で俺に言ってきた。

「え・・・？」

その言葉を飲み込むまで少し時間がかかった。

「この中にいる隊員が民間人を殺す・・・？」

「あくまでも噂ですよ。あまり信じないでください。」

軽く笑い、運転手はお釣りを渡した。

タクシীর扉が開かれ、俺はタクシーを降りた。

一体どういうことなんだろうか。

歩道の右から来た自転車にも気づかず、思いっきりベルを鳴らされた。

「あぶねえだろー！」

40代くらいのおじさんに怒鳴られ、はっと我に返った。

「あ、すいませんっ」

慌ててお辞儀をした。

噂は所詮、噂だ。うかつに信じても厄介なことになるだけだ。

井野は、頭からその情報を振り払い、目の前にそびえたつ20階建ての存霊対策局にゆっくりと入って行った。。。

エレベーターに乗り、8階のボタンを押し、上昇した。

そしてエレベーターを降り、通路をひたすら左に進む。その突き当たりが退治対策室になっている。

擦りガラスの扉には、“退治対策室”

と金色の文字で書かれていた。

ここに来るのも1か月ぶりだなあ。

俺は、その重たい扉をゆっくりと開けた。

すると、みんなの視線が俺に集中した。

俺が気まずくしていると、

「よぉ〜。おかえりい〜」

橋本が大声で出迎えてくれた。

「あ、戻りました。なんか心配かけてすいませんでした。」

一応、みんなに謝っておく。

「気にすんなって。さあ、足もこんなだし、座って座って。」

橋本は俺のデスクに誘導した。

妙に橋本のテンションが高いのはきのうせいだろうか。。。

「よーこよーこ。」

俺は椅子に深々と腰をかけた。

ふと周りを見ると、何かが変わっている。。。

何か、見慣れないというか、空気が違うというか。。。

あ、そうだ。前にいた人のほとんどが身に覚えのない人たちに変わっている。

数日しか会ってなかったとしても、自分の前や隣の人たちの顔くらいさすがに覚えている。

それが今では初めて会う人たちになっている。



「まさか。。。」

「すまない。井野。」

橋本が俺のところへ歩み寄ってきて、そう謝った。

「え、っ、っ、っ。。。」

だいたい検討はついていた。

「ああ。1か月前の惨劇でSH部隊は壊滅、AGUKI部隊も半分が重傷で退任、

我々RYUJI部隊も1人を失った。でもうひとりも重傷でまだ入院中だ。」

「なんてことだ。。。」

処理班が一日で半分程度しかいなくなってしまったのか。。。

「あの場で援助していた支援の人も8人のうち2人が死んだ。」

「そんな。。。」

改めて聞かされる被害の大きさを知り、再び憎しみと悲しみがこみあげてくる。

橋本のテンションが高かった理由が分かった。

俺が戻ってきたことで、悲しみを紛らわすためにそう振る舞っていたのか。。。

俺は強く拳を握りしめた。

「で、今の編隊はどうなっているんですか？」

俺は力なく質問した。

「我々RYUJI部隊は欠如した2人を再び補充して5人編成。

SH部隊の代わりに塚本毅つかもとたけし隊長率いるTAKE部隊を6人で再編成。

AGUKI部隊は我々同様、欠如した3人を補充し、5人編成。計、今まで通りの16人だ。」

「塚本毅。。。」

どこかで聞いたような覚えがある。

「ああ、塚本は今まで情報統計室の指揮官をしていたそうだ。」

橋本は、すかさず補足する。

あ、そうだ！重要会議があるといつもあいつが前に立っていた。

「お前は知っているはずだろ？」

「ああ、はい。まあ、話したことはないですけど。。。」

「そうか、まあひとつよろしく頼む。」

橋本は肩をポンと叩いて、事務所から出て行った。

俺は、その塚本の顔を探してみる。

・・・いた。

俺の斜め右奥にいるのが奴だ。

相変わらず、机に足をのっけて、背もたれにとっぴりとメタボリツクな体を任せている。

“ ったく、態度のでかい奴だ。。。”

塚本を見ていると、その視線を感じたのか、塚本もこちらを睨んできた。

俺は慌てて視線を自分のデスクに戻した。

“ なんか空気が重いなあ”

俺は少しバランスを崩しながらも椅子から立ち上がり、外の空気を吸いに部屋からでた。

外の休憩室に行くと、橋本が煙草をふかしていた。

すでに灰皿には数本の吸い殻が溜まっていた。

「お、また会ったな。」

にやけながらこっちを見てくる。

「そりゃ、同じ部署なんですから会つに決まってるでしょ。。。」

「まあ、そう堅いことを言うなって。」

「煙草もほどほどにしてくださいよ？」

「分かってるって。これでも努力はしてるんだ。」

橋本はそう言い、吸い終わった煙草を灰皿に入れ、ベンチに腰をかけた。

俺もその隣に座る。

「それにしても秋の風は気持ちがいいなあ。」

「そうですね。日中なのにそこまで暑くもないですね。」

空には薄い雲がかかっている。

俺は、この場所に来ると、嫌なことも忘れることができるような気がして、このテニスコート1面分くらいのテラスが好きだ。

すると、ふと思いつくことがあった。

「あ、隊長。なんか変な噂を聞いたんですが。。。」

それを聞くなり、橋本ははっとこちらを向いた。

「その。。。この対策局の隊員が、民間人に危害を加えたって、聞いたんですが。。。」

途切れ途切れに、橋本に伝えた。

橋本は少し黙っていたが、やがて口を開いた。

「ああ。本当だ。この局の“軍事管理室”という部署が、発砲した銃弾が誤って民間人に当たってしまったのだ。」

「そ、そうなんですか。。。」

俺は、橋本がすんなりと真実を話すのは予想外だった。

「幸い、その民間人は軽傷で済んで、被害者からも、この事件は丸く収めてくれるそうだ。」

「それは、良かったですね。」

「ああ。その撃った隊員は辞任した。全く、民間人に発砲したなんていう情報を聞いた時には驚いたよ。」

橋本は軽く笑って、よどんだ空気を誤魔化してくれた。

“人騒がせな運転手野郎だな。。。”

朝方の事を思い出し、苦笑した。

橋本は、立ち上がり、

「んじゃあ、先に戻ってるわー」

と、再び事務室へと向かっていった。

俺はその背中を見送った後、8階からの眺めを一望した。

8階というのはそこそこ高いもので、ある程度の外観を見渡すことができる。

俺は大きく深呼吸をした。

その直後！

“ピカッ!”

突如、数百メートル先の住宅街の路地裏から、とてつもない強い赤い光が目差し込み、ぎゅっと目を瞑った。

「んな、なんだ?」

恐る恐る目を開けて、さっき光った場所へと目を向ける。

そこには、誰かが狭い通路を歩いているのが分かった。

その光とは……